

## 技術士包装物流会3月度研究会 講演要旨

日時	令和3年3月15日(月) -- 18:00~19:30
場所	ZoomによるWEB配信
演題	「総合物流企業の技術者として活動してきた経験、実務を振り返って」
講師	井沼 俊明 氏 東京大学 生産技術研究所 情報・エレクトロニクス系 研究部門 技術士(経営工学/電気電子部門) 当会理事
内容	

### 1. 概要

3PL 企業の日立物流社(電機系物流子会社)33年、総合陸運の佐川急便社(宅配サービス)5年の合計約38年間の企業人・人生の中から得た経験をエンジニアの立場からお話し頂いた。日立物流時代は日立との連携により、ロジスティック技術の研究により再生医療・細胞基材の定温輸送梱包の開発等実施、佐川急便では特命プロジェクトの推進とロジスティクスチームの技術力の底上げに寄与した。

### 2. 日立物流社時代

本社技術スタッフとして順調に物流技術者としての実績をあげる。新規建設の倉庫計画、自動倉庫の計画、制御技術を設計し技術を磨いた。一方日立グループ以外の顧客とのプロジェクトにより新しい分野、外部連携の実績も上げた。

また外部環境の変化から日立製作所は家電事業の隆盛と減退、パソコン事業の隆盛から減退という大量生産・大量物流の時代から、知能IT中心・運ぶ物の無い時代に移って来た。その為、日立物流はそれまでの日立グループ偏重から非日立顧客(流通主体)に大きく舵を切り技術中心組織から営業中心組織へ変化した。

このような中で技術競争力を維持向上させ未開拓の顧客獲得に向けて、日立製作所の研究所や外部機関と「物流」で連携する可能性を模索した。

日立製作所との連携業務では“再生医療の細胞搬送事業化”“RFIDを用いたロジスティクス改善の実施”等に取り組んだ。日立物流時代にπ型技術者として、技術士の経営工学、電気電子部門を取得した。

### 3. 佐川急便東京本社時代

経済産業省の「人活制度」を利用して佐川急便本社 ロジスティクス活動組織のGOALチームへ異動。ロジスティクスチームの技術力の底上げに教育研修担当として寄与すると同時に、自身は経営幹部の特命プロジェクトに実践部隊として取り組み成果を上げた。

#### 1) 造船物流

三菱重工業が長崎で大型客船を造船。工場から現場への資材輸送、在庫管理、客室への部材の運び込みなど、人力、輸送機を駆使してプロジェクトを完遂した。

#### 2) IPS細胞の輸送事業化検討

理化学研究所が主導して、IPS細胞から作った細胞を移植し、目の難病治療の手術が実施された。この為、定温輸送(特殊車両を製造して対応)を実施。失明からの社会復帰が期待されたが、再生医療と

しての手術は成功したものの、視力回復など根治治療に至らず、輸送事業としては継続しなかった。

### 3) COVID-19 の検査検体輸送

コロナ感染の初期に、PCR 検査用の検体回収輸送の要請が関係省庁から来た。人から人へ運ぶ佐川急便の飛脚便では感染者から検体を対面で受け取るリスクがあり対応できず。一方、場所から場所へ運ぶメール便、郵便は“非対面の受け渡しが可能”結果、ヤマト運輸、日本郵政は実施した。その後、日本全国に拡散したコロナ感染者へ対応となり、宅配 3 社以外に大手運輸会社が輸送を請負う状況に至った。現在は、検体以外にワクチンの低温輸送も始まり、PCR 検査検体で貢献したヤマト社他、西濃 HD、DHL 社が、自社便輸送で対応している。今後は、佐川急便社が“非対面の宅配便サービス”に着手するか否かが、検体輸送に限らず医療系の輸配送・回収輸送で強みを発揮できるかどうかの分かれ目である。

## 4. 2 社の連携

日立物流 33 年間、佐川急便 5 年間経験したが、両社の特性は大きく異なる。高い技術力、高品質、高コストの総合物流企業と、現場、陸運中心で営業力を核とする佐川急便。この両社の連携は、そのシナジーが大いに期待されたが、企業文化、社員スキル、社風の違いも大きく、2 社が融合した本格的に期待される成果はこれからである。

文責 研究部会 坂巻千尋